

## V 書籍の紹介

佐藤徹 編著 『エビデンスに基づく自治体政策入門ーロジックモデルの作り方・活かし方』  
(公職研、2021年)

日本評価学会会員・高崎経済大学 佐藤 徹

早いもので、本書を出版して1年余りが経過した。有難いことに、既に2度の増刷に至っている。また、多数の方々から書評を頂いた。一部を抜粋して紹介したい。

「本書はロジックモデルの入門書である。入門書ではあるが、単なる手法の解説書ではない。手法の背景にある思想及び日本の自治体固有の組織文化を踏まえつつ、ロジックモデルを導入することの意味と方法を解説した優れた指南書である」(『都政新報』2021年4月6日号、坂野達郎・東京工業大学教授)。「ロジックモデルの作成と活用を自治体現場に寄り添って論じる本書は実務者にとって、まさに痒い所に手が届くものとなっている」(『日本地域政策研究』第27号、2021年9月、長野基・東京都立大学准教授)。「本書の特長は、EBPMについて自治体の職員と方法論を中心とした研究者の双方の目線により、実践と方法論的な学術的議論の両面からアプローチしている点であろう」(『地域政策研究』第24巻第2号、2021年10月、香坂玲・東京大学教授、内山愉太・神戸大学助教)。「本書が素晴らしいのは、行政の政策形成プロセスにおいて、この仕組みをどのように導入すればよいかが、場面を想定しながら具体的に示されている点である」(『自治体学』第35-1号、2021年12月、沼尾波子・東洋大学教授)。

筆者の専門は行政学、公共政策論、地方自治論、自治体経営論である。学部と大学院で政策評価論を教えている。「ロジックモデル」との付き合いは、かれこれ20年以上となる。思い起こせば、本学会での初報告(第3回全国大会、2002年12月開催、於:成蹊大学)も、ロジックモデルに関するものであった。

行政は政治機関の統制下に身を置く以上、政治と科

学の均衡と調和をいかに実現すべきか、という難題がつきまとう。しかも、改革には官僚制が立ちはだかる。自治体行政評価の課題は、適切な評価指標の設定、計画や予算とのリンク、評価への動機づけ、ジョブローテーション

制度下における評価人材の育成など、挙げればキリがない。そこで、こうした状況を少しでも打開しようと、これまで様々な自治体でロジックモデルの構築や活用を軸に職員研修や導入支援を行ってきた。さらに、自治体職員が組織の枠組みを越えて、ベテラン、中堅、若手に関わりなく、自治体政策や自治体経営について語り合い学び合うプラットフォームとして、2012年2月、「自治体政策経営研究会」を立ち上げた。2016年から2017年にかけてはロジックモデルをテーマに計4回の公開研究会を開催したが、その際のゲストスピーカーを含む8名の自治体職員及び研究者との共同成果が本書である。

行政の活動は複雑かつ多様である。論理的整合性の高いロジックモデルの構築は容易ではない。かつて本学会(2017年、新潟大会)でも報告したように、ロジックモデルには、応用可能な幾つかの基本パターンがある。現在、上記の研究会のもとにロジックモデル研究ユニットを発足させ、全国の自治体職員とともに、基本パターンの解明を進めている。

